

大森勝夫の音 信たより

第4定例会の報告 平成22年 11月議会



河口湖からみる富士山 朝日が山頂を照らし始めました

みなさんこんにちは 大森勝夫です。平成二十三年になりました。直近の議会は十一月でしたので、そちらも交えて報告します。写真は一月下旬の河口湖から見た、明け方の富士山です。湖面に氷が浮き、逆さ富士の輪郭は曖昧ですが、空には雲ひとつなく、素晴らしい富士山を仰ぐことが出来ました。私は自衛隊の募集相談員もしています。今回、自衛隊の駒門(こまかど)駐屯地の視察に同行し

ました。その旅先で出会えた、すばらしい富士山の眺望がこの写真なのです。

富士山は日本の国の象徴であり美しい山です。昨今の国際社会、アジア情勢の中で、日本が富士山のように輝き安全な国であるためには、国際社会での交渉力・判断力が大きく影響します。

日本人だれもが富士山を愛しているように、国民だれもが日本を愛する気持ちを再認識することこそ、国際社会において日本が誇り高く歩んでいける原点ではないかと、朝焼けの富士山を眺めながら想いました。

富士山をみて日本をおもう

不平等条約を改正した明治時代の外交努力

町の議会報告から幾分忘れてしまいますが、年初の所感ということでお許しください。

政権交代後に、外交に関する諸問題が頻発した事態は偶然なのでしょうか。沖縄の基地問題における稚拙さ。尖閣諸島での事件。北方領土へのロシア大統領の訪問。このところ続く日本に不利な外交事例は、民主党政権の外交下手が招いたように思えてなりません。航海技術が未熟な江戸時代なら、一方的に鎖国政策で国交を断ち、交渉が下手でも国を守る事ができた。しかし、現在のように多くの国と経済的な関係を持つ状況で、外交の交渉力が貧弱であっては、国の安全は築けま

せん。沈黙を通すことで安全が保障されるはずはなく、自国の正当性を国際社会で認識してもらえない説明努力が必要なのです。

外交とは、日本にとって不利益な問題を解決する作業です。それぞれの国が、自国の利益を求めて主張しあうなかで交渉は進みます。自国の繁栄を得るために、あの手この頭の脳戦を仕掛け合う。国家間の交渉とは、それほど鬼気迫った真剣勝負であることを、為政者をはじめ国民も念頭において外交問題を考えるべきでしょう。

国家間の交渉で、一度譲歩してしまった点を取り戻す難しさは、明治時代に苦心して改正した不平等条約の経験から、日本は痛いほど学習したはずで、最近の政府の対応は、その歴史が生かされていません。近世の日本の歴史を理解し、誇りある対応をとらなければ、今後の国際社会において、日本の立場はますます危ういものになってしまうでしょう。ある国際ジャーナリストの話を引用すれば、「国家間の交渉はギリギリまで行うのが通例だ。共産圏の国が特に顕著だが、交渉の場では、一方的に自国の利益のみを主張する。相手国の立場や国際的な正当性などは考慮せず、自国に有利な条件だけを要求する。譲歩したほうが負けである。それが交渉だと割り切っている。交渉が進展しなければ、武力行使すらちらつかせる。そうすることで第三国が仲

介に入り、調停案を取りまとめるといふ展開まで想定している。そこまでギリギリの交渉をする。さらに、自分たちから譲歩案を出したわけではない事実まで明確にする。」

これはまさに、武器を使わない国どうしの頭脳戦である。このような図式が国際舞台における標準ともいえるのです。このところの民主党政権の交渉経緯を見るたびに、不安に陥ってしまうのは、私の杞憂なのでしょう。

永世中立国を掲げるスイスでは、中立国家であるために、スイスの国民男性すべてに徴兵義務を課しているという。それほどの軍事大国なのである。先進国の全ての国が、平和を維持するために費用と労力を費やしている。日本はその事実も理解しなければならぬ。

国家間の交渉を有利に進めるうえで、自国の軍事力が無言の威圧効果を発揮する事例は、歴史的にも常套手段として使われてきた。最近の国際交渉の場においても、発言力の強さは、話術のみならず、自国の軍事力に比例することが多いのも暗黙の事実である。

いま、日本の近隣アジア諸国が、急速に軍備拡大を進め軍事大国へと変貌を遂げている。この情勢の変化は、日本にどのような影響をもたらすのでしょうか。これは日本国民全員が考えなくてはならない課題であると思うのです。目をそらすことも、他人事にするのもできない現実の問題なのです。

## 「協働の町」を目指す提言書

### 大子町行政改革懇談会からの提言書

委員数十四人からなる行政改革懇談会から提言書が提出されました。そのなかで特に惹かれたのが「協働を目指した改革」でした。

行政に頼るだけでなく、自分でできる事は自分たちでしよう。行政の負担を減らし、身軽な行政にすることで、必要な分野への対応を充実することが出来る。自助・共助・公助の意義を理解し、広めていこうといった内容でした。また、「協働」の精神が浸透すれば、財政負担が減り「持続可能な町の財政確立」に繋がるといふ効果も提言されています。

「協働」の精神は大子町で進められてきた「無料化」と対極をなす発想に思えます。

「協働」の精神のもと、個人の義務的な分野は自分でやる。行政の責任である公共の分野は政治が行う。個人と行政の立場を互いに理解したうえで、それぞれの分野を互いに頑張っていくという関係が、これからの地域再生に必要な姿ではないかと思うのです。補助金に頼らず、限界集落から再生を果した地域があります。そのリーダーの講演を聴く機会に恵まれました。次項に掲載します。

### 限界集落からの再生、奇跡の「やねだん」

鹿児島県の旧串良町にある柳谷集落。通称「やねだん」と呼ばれています。やねだんの

公民館長に豊重哲郎氏が抜擢されたのが五十五歳のとき。以来十四年間情熱を傾け、ふるさと再生に尽くしてきた話を拝聴しました。

舞台上で熱心に語る豊重さんは、六十九歳とは思えないほど、情熱に満ち溢れています。語る言葉すべてが、苦勞を乗り越えてきた真実に裏づけされ胸に飛び込んできます。

最初の活動は、地区運営費を捻出するため、休耕畑に地元の高校生と芋を植えることから始めました。その収穫費の一部を使い、高年生の夢であったプロ野球観戦を実現させたのです。また寺子屋をつくり小中学生の学力向上も目指しました。反対者であっても、自分の孫や子供のためになる活動を実施すれば理解者になってくれるという努力でした。何事においても補助金はあてにせず、住民ボランティアから始めていったのです。「補助金をあてにしてたら、やってやろうという気は誰も起こさないやろ。人は感動すること動く。ボランティアだからこそ感動するし成功する。自分から本気になって動けば、それを見て感動した人がついてきてくれる。癌で死にそうになった。もうやめてと家族にも言われた。でも活動は止めなかった。本気になれば成功する。奇跡も起きる。癌さえ克服した。」

語る言葉の熱さに、目頭が熱くなることもしばし。地域再生リーダーの姿を学びました。

大子町議会議員 大森 勝夫